土性骨を見せる

労働者文学を三池から発展させよう

昨年闘争中に迎えたお盆を今年は会社の組織切り崩しに対決したなかで迎えようとしている。

文芸特集号はことしはいろんな事情で実現できなかったが、建築部ではとくに円虹サークルの仲間たちや、その他各支部のいく人かの仲間たちに依頼して、ささやかながらも文芸作品を掲載することができた。

ねばり強い抵抗のたたかい、会社の悪質な組織切り崩しに対決して行くなかで、痛感されるのは、もちろん各人が身についた学習によってつちかつた労働者としての認識の深さはいうまでもないが、それとともに日常の文化活動の重要性である。

文化活動を通して身につける労働者としてそして人間としての人間性の確立は、われわれがいかなる敵の巧妙な攻撃にも迷わず、しつかりとした労働者としての背骨をつくりあげ、第二組合脱落という恥ずべき行為もないはずである。

例年行なってきた「みいけ」の文芸作品で、すぐれた作品を発表した組合員・主婦たちが、いまもなお抵抗闘争の中で仲間とともにスクラムを組んでたたかっていることが、このことを明確にものがたっている。

学習活動の活発化とともに、こんごは文化活動も強力な推進がまたれていることは明らかであり、三池闘争できずきあげた三池での土性骨をもつ労働者文学を、ほりおこし、もりあげていこう。

盛況な方別集会

港務支部事務所が移転

港務支部事務所はさきごろから移転の準備を行なっていたが、七月三十一日新事務所に移転した。新事務所は港務所正門横の三池商事（売店）の隣りで、道路に面した平屋で事務室、会議室、日本間宿直室などに分かれ、各部屋は淡いグリンで塗られ、いままでの事務所にくらべるとずっと明るく気持のよいところである。

組合では新事務所移転を記念して八月四日を皮切りに五、七、八日と五回に分けて方別全員集会を行なった。

また、移転を祝って写真、盆栽サークルはそれぞれ作品を玄関横に展示してはなをそえ、方別集会に出席した組合員の目を十分楽しませた。

集会は午後五時からひらかれ、組合の現状を中心とした学習が、他支部の支部長を招いてひらかれたいま会社が職制を通じてさかんに攻撃をかけている組織切り崩しで職制から攻撃をかけられた組合員が自分の体験を発表して、組織切り崩しの実体を各人が出し合った。

また、謡曲サークルが日ごろの練習の成果を披露して組合員に鑑賞してもらい、このあと組合員から十八番のかくし芸も出るなど和気あいあいのうちに集会はすすみ、団結がさらに強められていった。

なお執行部から移転を記念して形ばかりのご馳走が出され、これは主婦会の協力を得ておこなわれた各回の集会とも、会議室に組合員が入りきれないほどのありさまでこの日の団結のうえに立って、会社の切崩し攻撃を断固としてはね返して行くことを意志統一して、方別集会は大きな成果をもって終了した。

方別集会で意志を統一（新事務所で）

壮観、盆栽の展示

写真サークルも作品展

港務支部事務所の移転を記念して、いま、組合入口の左右には盆栽と写真サークルの人たちが作品を展示して、組合を訪れる組合員の目を楽しませている。

写真、盆栽サークルとも発足まだ日が浅いにもかかわらず熱心に全員がサークル活動をすすめているが、日ごろの練習の成果をこの際組合員に披露しようと展示会を行なったものである。

とくに盆栽がズラリとならび、事務所に風雅をそえ、しばし暑さを忘れさせるほどの壮観さであり鑑賞する組合員もその見事さに賞賛の言葉を発していた。

新らしい事務所前にズラリと並んだ盆栽

三池激励決議

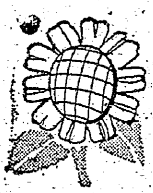
社会主義協会全国総会

三池闘争で終始支援をつづけてくれた社会主義協会では第三回全国総会を八月八、九日に東京でひらいたが、総会では三池への支援決議を満場一致決定してつぎのような激電を組合に寄せてきた。

社会主義協会第三回全国総会は三池労働者の不屈の闘魂と輝やかしきたたかいの歴史に心からの敬意を表し、働らくものの社会建設のために、ともにたたかうことを決議する。

一九六一年八月九日

第三回社会主義協会全国大会



俳句

平井分院　中島洋子

クチナシの香りかすかなラッシュのバス
放浪の果の雲灼け原爆忌
ケロイド秘めし乙女の胸やシャツ白し
ケロイドに平和を誓い原爆忌
閉山近しボタ山輝りて原爆忌

〃　布田ふみ枝

雨音の心にひびき梅雨孤独
長旅の友を案じて梅雨に入る
夏の夜の地震縫う手を暫し止め
うつむきて別れゆく背や夏の月
看病のかろき疲れや母の汗

〃　松永節代

理由なき配転怒りてかんな燃ゆ
不当配転汗した白衣に意志固む

平和キャンプに参加して

夏の海暮るるや平和の歌続く
夏の闇破る歌声どこまでも
被爆者の声ことにふるわす原爆忌

〃　中島穂子

不当配転夏の日に尚意志固く
かんなの赤配転の怒りこぼす一瞬
白衣のおくに乙女の胸の白き夏
暑き日々離職の友の身を案じ

〃　木下八重子

夕焼のホッパー轟音坑夫の不安
公傷坑夫の汗マーキュロを乾かす体温
どこかが燃える赤い夏帯きりりと締め
手花火に照らされみじかい草踏まれ
否定と肯定くりかえされて夕焼くる

本所主婦会　能勢幽女

秒の幻影花火消え去るおろかさよ
原爆忌太き流星とまどわず
電車スパークはぜて夜空の星殖ゆる
蟬の放声雨去りがてのひとときを
緑蔭の一樹人馬をいこわしむ

四山支部　中満樹声

踊る緑闘魂更に沸らしむ
坑内の汗石炭にしみいて尚輝りぬ
流汗太く石炭に滲むや差別の鞭
百合ゆれて乳房のゆれてバスはなやぐ
炭壁にいどむや汗に悔はなく

〃　清本はるき

遠き平和に汗して足を子に踏ます

三池に変災相続く

悲報告ぐマイク流れて蠅放す
慈雨来り子と居て昼の西瓜割る
鎌の光（て）り蛙の尿に濡れて刈る
坑内も梅雨白蟻帽灯に触れて舞う

〃　田中未草

黒き痰地炎に飛ばし不眠の坑夫
へつらう鉱夫へ鉱内ゴキブリの羽を鳴らす
炭壁黒く血を吸い汗のまま乾く
廃坑の瓦礫灼けつき鉱夫の死
浜の雑踏水着ケロイドかくし得ず

〃　谷口周

蚊を焼くや死刑執行吏の如く
脚切つたんだ鉱夫の胸の天瓜粉
ボーナス妥結会議は踊りつつ果つか
妻と語らうホッパー遠き端居かな
ハンケチ白く伏せけり分裂主義者の瞳

永野鼎衣

離職者（三川支部）

木影より駈け出るみんな靴白し
洗いあぐ食器へ森の緑映ゆ
燕ひらひら主婦提ぐ籠も野菜越す
職さがす運命きびしと日灼けたり
失職の眠れぬ夢に雷触れし

平井分院　竹内心子

炎天に洗濯物を干す背中・
大小が集り進む雲の峰
灼ける陽を背一杯に笑む労仂者
嫁ぎゆく友と語るも星祭
低音の歌がゆるがす糸瓜棚

宮浦支部　中園凡童

組立てじ踊櫓に人二三
どの団扇にも落書や住所ひま
水喧嘩見て来しことを面白く
紅たすき湯女サオさす涼み舟
すくう手をのがるる如く清水落つ

四山支部　高木坑衣

松川事件全員無罪となる

蟬どつと無罪の判決今下る
炭壁を打てばひびくよ判決の日
稲妻や子の寝姿の芋虫めく
細くなりし手足を愛す原爆忌
若人の合唱夏の海圧す

宮浦支部　永野草平

三池闘争一周年を迎えて

夜濯やピケの人等の労仂歌
動員の気配の窓に星ながれ
ピケ小屋の合唱ながれ月の秋
ピケ小屋のあと甦えり秋の草
鉱山を去る思いあまたに春は逝く
惜別の人の面にバラ明り

説得

四山　蓮尾四郎

新労に来れば夏季手当の格差分もらつてやると説得をなす
新労にゆきたる友よ行き逢えば何故うつむいてすれ違うのか
落盤死ありたる夜半の坑口に御安全の灯しづまりて見ゆ
軒下に夜干しの坑衣垂れしまま灯りを消して眠りたる家

＝詩＝　三本線

宮浦　高椋龍生

ハネ出して坑木を担ぐ
運搬工の破れた肩から
炭塵に塗れた血が噴き出している。

後肩の一人が
自分の肩当を当てさしていたが、
その肩はいかにも弱々しそうだつた。

二人の目と目が
ガチンとかちあうと
こつくりうなずき合つた。

電流のように
坑木を流れ合う心と心。

肩から肩へ
温かい人間同志の血汐と血汐が通い始める。
『同志つて有難てえもんだ
なんのくそ！
差別もへいちやらだ。』

坑帽へ入れた
筋金の三本線が
そう言つた。

（S36・8・8）

川柳

宮浦　永野草平

重労に荒れるわが掌を見つめたり
重労に耐える無事故を祈る妻
絵筆とる余裕にいえた坑内疲れ
警棒の虚勢くづれたピケの壁
ピケを張る縄帯ぐつと覚悟よし